

2026年1月11日 降誕節第3主日礼拝メッセージ
「救いの経験」

牛田匡牧師

聖書 出エジプト記 14章 10-31節

今年も早くも 10 日が過ぎました。日本が「お正月だ」「新年だ」と言っている間に、世界では 1 月 3 日には、アメリカ軍による南米ベネズエラに対する軍事侵攻が行われました。特殊部隊が首都を急襲して、大統領夫妻を拘束してアメリカに連行したそうです。トランプ大統領の言うように「正しいのはアメリカであり、ベネズエラは間違ったことをしている。社会主義で独裁国家で、民主化を望んでいる多くの人々もアメリカの行動を支持している」のだとしても、これは国際法を完全に無視したアメリカの独断であり、「暴力こそが正義だ」とでも言うような誤った認識を世界に示すものに他なりません。

ロシアとウクライナの戦争も、イスラエルにおけるパレスチナ人の虐殺も、一向に終わりが見えません。世界の平和と安全のために尽くすという国連の存在と働きが、結局のところ言葉だけで無力なものに過ぎないのか、と落胆させられるような年始早々の出来事でした。日本で憲政史上初めての女性首相となった高市早苗首相は、「何か新しいことをしてくれそうだ」という人々の高い期待感を背負いながらも、軽率な言動から中国との外交関係を急速に悪化させています。2 度の世界大戦と大量破壊兵器の開発によって「戦争の世紀」と呼ばれた 20 世紀が終わり、新しい 21 世紀になってから既に 4 分の 1 が過ぎました。また国連が発足して 80 年が過ぎたとはいえ、結局は人類は根本的には何も変わっていない、学んでいない、ということに過ぎないのでしょうか。そのような現実の中で、私たちは力を持たない一人として、ただ平和を祈ることしかできないのでしょうか。聖書の言葉に聞きたいと思います。

今回の聖書のお話は、ヘブライ語聖書の中の「出エジプト記」から、モーセに率いられた古代イスラエルの民が、追って来るエジプト軍から海を渡って逃げ切ったというお話をしました。エジプトの国で奴隸として使役され、過酷で危険な労働に従事させてされていた古代イスラエルの民の苦しむ姿を見、その嘆きの声、叫びの声を聞いた命の神は、指導者としてモーセを選び、モーセによってエジプトから古代イスラエルの民を脱出させました。だから「エジプト脱出の物語」ということで「出エジプト記」と言われています。古代イスラエル民族の出自、アイデンティティーを物語っているお話です。そしてその物語の中でも一番の山場、最大の奇跡とも言

えるのが、この「海を分ける」お話を言ってもよいと思います。

一行の前には海、後ろにはエジプト軍の戦車が迫り来る中、モーセが海に向かって手を伸ばすと、水は左右に分かれて、彼らのために右と左で壁となった。そして人々は、海の中の乾いた所を進んで行き、一行が海を渡り終えたところで、再びモーセが海に向かって手を伸ばすと、左右に分かれて壁になっていた水が元通りになった。そのために追って来ていたエジプトの軍隊は皆、海に飲み込まれて全滅した。それによって古代イスラエルの民は、追手から無事に逃げ切ることが出来た、という奇跡の物語です。映画や絵本、紙芝居では、ハラハラドキドキしながら、この物語を見聞きして、「ああ良かった。神様の起こした奇跡によって、みんなが助かった」と思えるかもしれません、聖書に記されているこの物語を、現代に生きる私たちはどのように受け止めることができるでしょうか。もはや自分の力ではどうしようもできない。四面楚歌、八方ふさがりで、追い詰められている時に、モーセのように神に祈れば、予想もしなかった形で逃げ道が備えられる。そして反対者たちは天罰を受ける……。そのようなことが示されていると理解してよいのでしょうか。もちろん、そうではないはずです。

今から約 3200 年以上も昔、紀元前 13 世紀頃の出来事として語り継がれて来た物語を、そこに記されている文字通りに受け止めると、モーセの時には起こった奇跡が、何故それ以降は起きていないのか、という疑問に至ります。「出エジプト記」によれば、エジプトを脱出した民の数は、「女と子どもは数に入れず、徒歩の男だけで約六十万人であった。雑多な人々が多数、これに加わった。羊や牛といった家畜もおびただしい数であった」(12:37-38) そうですから、全部で 100 万人や 200 万人以上だっただろうと考えられます。しかし、それだけの民が移動した出来事があったということについて、古代世界に一大文明を築き上げ、沢山の記録を残している古代エジプトは、一切の記録を残していません。ですから、この「出エジプト」の物語は、歴史的事実と言うよりも、むしろ古代イスラエル民族の出自を物語る神話・伝説であると考えられています。

モーセと民が渡った海についても、聖書の記述からは、具体的にどこかということは分かっていません。恐らく紅海のどこかであり、「水が左右に分かれて壁となり、民は海の底の乾いた地面を歩いて対岸に渡った」というよりは、大風と引き潮が重なった時に、民は身軽だったために海辺を渡ることができた。一方で追手たちは満ち潮と重なり、戦車や装備が重かったのでぬかるみに足や車輪を取られて追うことができなかつたということだったのでしょうか。自分たちの実感として、絶体

絶命と思われた中、命の神からの奇跡としか思えないような形で九死に一生を得た。そのような経験が、何世代、何十世代もの間に語り継がれていく間に、覚えやすく語りやすい形に誇張され、記憶されていったのだろうと考えられています。

古代イスラエルの民にとっての「救いの経験」「救われた経験」としての出エジプトの記憶は、ともすると「海を渡った」という奇跡の物語として覚えられているかもしれません。もちろん、古代イスラエルの民が経験した奇跡は、これが最後ではなく、民はこの後も数々の奇跡を経験していきます。例えば、この後も民は荒れ野を40年もの間放浪し、その中で天から食べ物が与えられるというような奇跡も経験していきます。そのようにしてこの出エジプトの物語は続いていくわけですが、大事なのは「どのような奇跡が何回起きたか」「どのような奇跡に恵まれたか」ということではなく、むしろ「神が常に共にいて歩まれた」ということなのだろうと思います。

今回の14章でも、民は迫り来るエジプト軍を恐れて、モーセに文句を言います。エジプトにいた時には、「この苦しみから救い出してください」と言っていたにも拘わらず、エジプト人に追われる身になると、「エジプト人に仕えていた方が良かった」(12)と言う……、何とも身勝手です。そのような民に向かってモーセは「恐れてはならない。しっかりと立って、今日あなたがたのために行われる主の救いを見なさい」(13)と言いました。「恐れるな」「怖がることはありません」とは、ヘブライ語聖書にも、新約聖書にも一貫して何度も述べられている神の言葉です。それだけ人間は弱く、怖がりで、すぐに道を誤ってしまうということなのでしょう。「しっかりと立ちなさい」「大丈夫、あなたは立つことができる」神様が守って下さると信頼しなさい。「主の救いを見なさい」……。助けや救いというものは他でもない命の神から来るので、とモーセは民を激励します。

しかし、ここで注目したいのは、他ならぬモーセ自身もまた、怖かった、迷っていた、心が揺れていたと言うことです。もちろん彼は、指導者として民に対しては弱みを見せられなかったとはいえ、「恐れるな、大丈夫だ」と語りながら、目の前には海があり、後ろからは追手が迫って来ると言う中で、「神様、一刻も早く助け出してください」と痛切に祈ったでしょうし、神様に対して文句も言ったかもしれません。15節では神がモーセに対して「なぜ私に向かって叫ぶのか」と言われました。具体的にモーセが何を叫んでいたのかは記されていませんが、モーセもまた限界を持った一人の人間として、神に救いを呼び求めていたというわけです。そして彼は、神から示された通り、指示された通りに行つたことで、民一行は追手から逃れるこ

とができました。ですから、「恐れるな。しっかり立て。神の救いを見よ」(13)とは、モーセが神の言葉として民に語りつつ、他でもないモーセ自身に対しても語りかけていた叱咤激励の言葉でもあったというわけです。

神の救いは、人知を超えた奇跡、超自然現象として起こるものではありません。もしもそうであるならば、出エジプトの際にモーセが手を伸ばして海が分かれたように、海を分ける奇跡があちこちで起こったり、イエス様がなされたような数々の奇跡が、あちこちで起こったりしてきているはずです。それらが起きていないとすることは、神の救いとは、そういうものではないということです。むしろ、どんなに追い詰められ、なす術がないように思われても、それでも共にいてくださる神に信頼して、できることをやってみること、そうすることで、思いがけずできたという経験、それが救われた、助けられた、祝福されたということなのではないでしょうか。

祈りというのも同様です。「神様、私にできることはもう何もありませんから、あとは神様万事よろしくお願ひします」と言うことがお祈りなのであれば、それは「私は本当はエジプトを出たくなかったのに、あなたのせいで連れ出されたから、どうしてくれるのか」と民が文句を言ったのと同じで、自分を棚上げして責任逃れをしているだけになってしまいます。そうではなくて、「私も確かに怖いし、逃げ出したいし、追い詰められているけれども、それでも神様が一緒にいて、何とかしてくださると信頼して『何とかやってみましょう』とやってみること」、そのことが本当の「祈り」であり、また救いの経験なのではないかと思います。確かにその結果は、もしかすると、当初に自分が期待していたのとは違う結果になっているかもしれません。しかし、だからと言って、神から見放され、神が離れて行ってしまっているということではないはずです。

「祈りとは行動することであり、やってみて、出来たところまでが、その人の信仰」だと聞いたことがあります。「祈り」とは、単に現状の不満を嘆き、願い求めるだけではなく(嘆願・請願)、現状を受け止め感謝しつつ(現状認識・賛美・感謝)、その上で共におられる神様から力づけられ、励まされて押し出していくこと(実践・行動)です。そして、「救い」の経験もまた、そこにあるのだろうと思います。今日を生かしている私たち一人一人は、それぞれにこれまでの歩みの中で、生かされて来た経験、助けられ、また救わってきた経験があるはずです。それらの経験を基にして、私たちはこれからも、共におられる神様に背中を押され、支えられながら、この世界に向かって歩み出していくます。